

日本大地震

斎藤茂吉

青空文庫

西暦一九二三年九月三日。うすら寒く、朝から細かい雨が降った。日の暮に〔Spatenbr
 211〕《シュパーテンブロイ》食堂の隅の方に行つてひとり寂しく夕餐ゆふざんをした。七月十
 九日にミュンヘンに著いて以来、教室では殆ど休ほとんなく為事しごとを励んだのであつたが、いまだ
 に自ら住むべき部屋が極きまらない、極まりかけては南京虫に襲はれ襲はれていまだに極
 まらずにゐる。それも教室の方の為事を休んで部屋を捜すのではないのは、つまり教室の
 方は縦たとひ一日の光陰をも惜しむがためであつた。けふも新聞の広告で見当を附けておいた
 数軒の部屋を見まはり、今夜はKlenze《クレンツエ》Str.《シユトラセ》三十番地の部屋
 に寝泊りして虫の襲撃を試すつもりである。

いつもなら二人の同胞がゐて食事を共にするのであるが、けふは都合があつたと見えて
 誰も来ない。まるい堅さうな顔をした娘が半立リットル突の麦酒ビールを運んで来て、しきりに愛想を
 云ふ。『ドクトルまだ恋をしたこと無い?』などといふことをいふ。『まだ無いね』など
 といふ。『けれど、シナでは十三四でもう結婚すると云ふぢやない?』『それは百姓ども
 のことだ、僕のやうな学者は矢張り結婚はなかなかしないものだ』『さういふものなの?』
 『どうだ、恋をして日本へ行くか、Fujiyama《フジヤマ》の国へ連れていかうか』『え、

行きたいわ』などといふ会話をしたりする。さうすると幾らか気の晴れるのを覚えるのであつた。

そこに夕刊の新聞売が来たので三通りばかりの新聞を買ひ、もう半立突リットルの麦酒を取寄せて新聞を読むに、伊太利イタリーと希臘ギリシヤとが緊張した状態にあることを報じたその次に、『Die Erdbebenkatastrophe in Japan』と題して日本震災のことを報じてゐる。

新聞の報告は皆殆ど同一であつた。上海シャンハイ電報に拠ると、地震は九月一日の早朝に起り、東京横浜の住民は十万人死んだ。東京の砲兵工こうしやう廠は空中に舞上り、数千の職工が死んだ。熱海・伊東の町は全くなくなつた。富士山の頂が飛び、大島は海中に没した。云々である。

私は暫く息を屏めて是等これらの文句を読んだが、どうも現実の出来事のやうな気がしない。併し私は急いで其処そこを出で、新しく間借しようとする家へ行つた。部屋は綺麗に調べてあつたので私は牀しやうじやう上に新聞紙と座布団とを敷き尻をべたりとおろした。それから二たび新聞の日本震災記事を読むに、これは容易ならぬことである。私の意識はやうやく家族の身上に移つて行つた。不安と驚愕きやうがくとが次第に私の心を領するやうになつて来る。私は眠薬を服してベットのの上に身を横よこたへた。

暁になり南京虫に襲はれこの部屋も不幸にして私の居間と極めることが出来なかつた。

九月四日の朝、朝食もせず其処を出て日本媼のところに急ぐ途中N君に会つた。N君も日本の事が心配で溜^たまらぬのでやはり朝食もせずに日本媼のところに来た途中なのであつた。N君の持つてゐるけふの朝刊新聞の記事を読むと、きのふの夕刊よりも稍^{やや}委しく出てゐる。コレア丸からの無線電報に拠るに、東京は既に戒嚴令が敷かれて戦時状態に入つた。横浜の住民二十万は住む家なく食ふ食がない。ロイテル電報は報じて云。東京は猛火に包まれ殆ど灰^{くわいじん}燼に歸してしまつた。紐^{ニュー}育^{ヨーク}電報が報じて云。大統領Coolidge《クーリツジ》は日本のMikado《ミカド》へ見舞の電報を打つた。それから能^{あた}ふかぎり日本の震災を救助する目的で直ちに旅順港にゐる米国分艦隊をして日本へ発航せしめた。また、上海投^{とう}錨^べ中の英国甲鉄艦Despatch《デスパテチ》号も既に日本へ向つて出帆した。なほ、日本の地震はミュンヘンの地震計に感応し、朝の四時十一分頃から始まり五時少し前に最も強く感応した。云々。

二人は近くの珈^カ琲^{フェ}店で簡単に朝食を済まし、日本媼のところに止宿してゐる二人の同胞と故郷のことを話合つた。私も部屋のことです^かう愚^{おろ}図^ず愚^{おろ}図^ずしてゐてはならぬと思ひ、けふも数軒部屋を見、遠くて不便であるが一間借りるやうに決心した。私はけふはもう教室に

行く勇氣はなかつた。夕刊を読むと日本震災の惨害はますますひどい。私等は何事も手に附かず、夕食後三人して麦酒を飲みに行つた。酒の勢を借りてせめて不安の念を軽くしようとしたのであつた。

九月五日。日本の惨事は非常である。部屋の中に沈黙してゐても何事も手に附かない。

九月六日。思切つて、Thorvalsen 《トールワルゼン》 Sir. 《シユトラセ》 六番地に引越してしまつた。ここには南京虫は居なかつた。教室まで遠くて不便であるが、日本の状態がこんなであつて見れば、私自身今後どう身を所決せねばならんか今のところ全く不明である。そこでせめて南京虫のゐない処に落付かうと決心したのであつた。

けふは、もう日本震災のための死者は五十万と註してあつた。大小の消火山は二たび活動を始め、東京・横浜・深川・千住・横須賀・浅草・神田・本郷・下谷・熱海・御殿場・箱根は全く滅亡してしまつた。政府は一部京都一部大阪に移つた。東京は今なほ火^{くわえん}焰^{えん}の中にある。首相も死に、大臣の数人も死んだ。ただ宮城の損害が比較的^{すくな}避難民のために既に宮城を開放した。仏蘭西^{フランス}大使館、伊太利^{イタリー}大使館は全く破壊した。帝室博物館、二大劇場、帝国大学、日本銀行、停車場等も廃滅に歸し、電報電信の途は全く杜絶^{とぜつ}してしまつた。云々。

次の日も、次の日も、教室に行く気にはなれない。部屋に籠こもつて自分の所持品などを整理しようとしても直ぐ疲れた。併し飯めしくひに街頭に出ると、食レストラン店にある客などが態わざわ々ざ私のある卓のところまで来て震災の見舞を云つた。ある時には、途中で行過ゆきすがつた背ルツ囊クサツクを負うた一人の老翁がまた戻つて来て、私を呼止めて見舞の言葉を云つて呉れたりした。日本からの直接通信が始めて英京倫敦ロンドンに届いたといふのが新聞に出たが、それを読むと前に読んだ間接通信の記事内容よりももっと深刻であつた。また民衆と軍隊との衝突があり、朝鮮人と軍隊との市街戦が報じられてあり、新首相山本権兵衛子爵に対する暗殺企図、数名の大臣の死亡なども報じられてあり、五十万の人間と、五億ポンドの財産とが消失されたことを註してあつた。

さういふミュンヘン新聞の手がかり以外に、伯林ベルリンの友人からも何処どこからも何等事件の真相を知るべき手がかりが全く杜絶してしまつてゐる。夜はよく眠れず、暁あけがたになつてとろとろとしたかと思ふとしきりに夢などを視みた。夢では、妻のやうな恰かつかう好をし、妻か誰か分からぬ一人の女と、一人の童子とが畳のうへに坐つてゐる。それが向うを向いて居り、幾ら呼んでも依然として向うを向いてゐる。それで夢が醒めてしまつたりする。ある夜、麦酒ビールに酔つて歸つて来て寝た。さうするともうもうと火焰の靡なびいて居る光景を夢に視

たりした。私は或時には、東京の家族も友人も皆駄目だと観念したこともある。

或日、朝からN君を訪ねて、二人して当もなく街上を歩いた。とある広場の古物商に能の面が二つばかり並べてある。この古物商には不思議にも日本物が並べてあるので、鎧があり、扇子があり、漆器があり、花瓶があり、根付があり、能衣裳などもある。これは戦後に土地の人が売払ったものに相違ない。N君はどう思ったか、齒を黒く染めた女の能面を一つ買った。二人は街を歩いて行つてIsa《イーサル》川の橋を渡り、川原に下りて行つた。N君の家は東京の郊外にあるから、これはどうにか損害を蒙らずにゐるらしい。併し親戚知己は幾人も東京の殷昌区域内に住んでゐる。それらの人々は到底駄目だらうといふことを話しあふ。二人は土手を上つて行つて黒麦酒を飲んだ。酔つて幾らか鬱を散じてまた二人は川原の方に下りて行つた。川原には川柳の一めんに生えてゐるところがある。そこに五六の頑童の遊んでゐるけはひがしてゐたが、突如として、Chinese《ヒネーゼ》:と叫んで柳のかげに隠れる。また、Chinese《ヒネーゼ》:と叫ぶ。『ヒネーゼ!』と叫ぶのは輕蔑して調戲ふつもりなのである。

N君はその能面をかぶり、川原で踊つた。能舞の様式を知つてゐるではなし、さればとて、Plaza《ブラツツル》で見るやうな、バヴァリア民間舞踊の恰好でもないが、日本震

災のための不安動揺の心理は、N君にそんなことをさせたのであつた。さうして逃げていた童子等も其処そこに戻つて来て、笑ひころげてそれを見てゐる。そんなことなどもあつた。そして一日一日が暮れて行つた。通信は全く絶え、たまたま配達された故郷からの書信を読むと、極く平安事なきもので、何の役にも立たぬものである。私等は或日には日本飯を焚たいて食つた。それに生卵をかけ、大根などを買つて来てむさぼり食つたりしたのである。

日本の知人の顔などが時に眼前に浮んでくるが、その人々の中にはもう死んでゐるものもあるだらうといふ一種悲痛の心持が附帯してゐる。さういふ写象のうちには今どき小学校に通つてゐた筈はずの長男の顔なども浮んでくる。それから私みづからの近き未来の運命のことなどが意識の上にのぼってくる。しまひにはさういふ意識のなかに自ら涵ひたつてしまつたせいであらうか、日本軍艦数隻が沈没し、伊豆いづの大島が滅して半島の近くに新しい島が出来、神ハイリーゲ聖江の島が全く無くなつてしまつたといふ、さういふことなどは余り気にせぬやうになつた。

九月十日ごろN君のところに故郷の家族無事といふ電報が届いた。電文は『ヂシンヒドイブリ』としてあつた。なか二三日おいて十三日の夕がた私のところに、柏林ベルリンのM君から電報が届いた。電報は、Folgendes Telegramm aus Japan erhalten "Your family friends safe"

= Mayeda としてある。

家族も友人も無事といふ英文電報の方は、神戸から中村憲吉君がやうやうの事で打つてくれたのが、伯林大使館に届き、毎日毎日情報を聞きに押懸けてゐた私の友の一人が沢山の電報の中から其を見付けてM君に知らせたから、M君は独逸文を少し附加して至急報で打つて呉れたのであつた。私は一人で麦酒^{ビール}を飲みに行き、労働者等のわめきどよめく音声の側に、齒の鈍痛のやうやく薄らいだやうな氣持で数時間ゐて歸つて来た。

翌日朝食の後、買物をした。教室で使ふ色素、靴墨、ナフタリン、石鹼、揮発油、靴下針と糸などを買ひ、途中でトランク一つの代価を訊ねると娘店員^{たう}が来て、zwei milliarden d reimal hundert millionen Markと云つた。これは二十三億^{マルク}麻克のことである。

次の日教室に行き教授に会つて大体日本地震の有様を報告し電報のことをも話した。教授も助手も研究生も標本係の女も非常に喜んで呉れた。その日教授は私を自分の部屋に呼び、『もう率直にいひますが、それでは研究費として毎月英国貨四磅^{ポンド}づつ払つて下さい』と云つた。

それから私は教室の為事^{しごと}をどうしても急がねばならぬと決心して、連日教室に通つた。九月の末といふに街路樹の葉が黄色になつて落ち、日本晩秋のやうな氣持の時もあつた。

独逸^{ドイツ}の状態がだんだん悪くなり、為替相場も急転して下つた。九月廿七日には十四ばかり行はれる筈の国民党の集会が禁ぜられ、集会所や大きな麦^{ビール}酒店をば軍隊と警官とで厳しく固めたこともあつた。[Hofbrau] 《ホーフブロイ》のやうなあんな盛^{さかん}な麦酒店でもその三階は十月半ばには既に閉鎖したほどであつた。

十月十四日にはじめて大阪毎日新聞九月三日の号外を手に入れ皆頭を集めて読んだ、『東京全市焦土と化す』といふ大きな見出しがあり、碓氷峠^{うすひたうげ}から東京の空が赤く焦げてゐるのが見えるとも書いてある。これは想像よりもまだまだ悲惨である。十五日には大阪の〇君から大阪朝日新聞の週報を受取り、廿一日には参謀本部附のK少佐から大阪朝日新聞を借りて読んだ。深川の陸軍糧秣^{りやうまつしやう}廠の広場で何十万の人の死んだ所や、両国の橋の墜^おちた所などを読んだ。どうも息がつまるやうである。三面の方には、佐渡まで帰らうとしてやうやく長野市の停車場まで落延びて来たひとりの女を見るに、自分の髪の毛が全く焼け焦げ背には焼死んだ子を一人負つてゐるといふ記事などもあつた。

そのうち東京の家から手紙があつて、しきりに帰国を要求して来てゐた。ミュンヘンも追々寒くなり町には毎日霧がかかるやうになつた。Hitler 《ヒットレル》事件といふのもその間にあつた。独逸の絵入新聞にも、死骸が山のやうに積まれてある日本震災の惨状が

載るやうになり、或時には吉原よしはらで焼死んだ遊女の死骸を三列ばかりにして並べて、そこに警官がひとり立つてゐる写真を載せ、これは本国の日本で既に発表禁止になつたものと註したことなどもある。さうして日一日と暮らしてゐる間に私は決断して当分ミュンヘンに止まらうと思ひ、東京の親しい友に金を借ることを頼んだりした。

十二月十三日になつて、「大正大地震大火災」といふ雑誌を借り、真に身ぶるひするやうな大地震の有様を読んだ。その中に幸田露伴翁の談話があつたが、私はその中の一二節をば手帳に書取つた。

○そこで一言を人々に贈らうと思ふ。おもへば言葉は甲斐無いものである。千百の言葉は一団の飯にも及ばず、びびげん々の言は滴てきてき々の水にも如しかぬ場合である。けれども今の自分の此の言葉は言葉とのみではない。直ちに是自分の心である。○そこで仮令たとひ美酒蘭燈の間にゐて歌舞歓樂に一時の自分を慰めてゐても、何処かにこれを是認せぬものがある。つまり心が一つでなくて、二つになつてゐる。人といふものは二氣あれば即ち病む、といふ古い支那の諺ことわざにある通り中略宜しく胆たんを張り氣はを壮さかんにし、飲食を適宜にし、運動を怠らずして、無所畏心むしよゐしんに安住すべきである。○宗教上の信仰を有する人は、かかる時こそ宗教の加護を受くべきである。観音の額には無所畏むしよゐの三字が示してあるではないか。不動尊は不

動經に、我は衆生^{しゅじやう}心中^{しんちゆう}に住すと説いてあるではないか。中略神仏に人ををののかすものはない。皆各其大威力^{そのだいありよく}大慈力^{だいじりき}によりて人々に無所畏^{むしよゐ}を得しむるものである。まして無神無仏の徒は既に神を無みし仏を無みするだけの偉いものであるから、夢にも恐怖心などに囚はれてはならぬ。云々。

私は実に久しぶりで翁の言に接したのである。そして独逸語で頭を痛めてあるときに、是等^{これら}の言葉はすらすらと私の心に這入^{はひ}つて来た、のみならず翁の持つ一つの語氣が少年以来の私に或る親しみを持たせるのであつた。カアル・マルクスの『宗教は国民の阿片^{あへん}である』(Religion ist das Opium des Volks.)といふ西暦一八四四年の言葉が、西暦一九一七年の露国革命の際に、彼のグレゴが聖母の像と相對した壁面上に書かれたといふ。これは莫斯科^{スカウ}の出来事で、レニンなどが主になつてああいふことをやつた。レニンは、" [Die Religion ist Opium für das Volk.] "と書いて、さて、宗教といふものは下等なフーゼル酒^{しゆ}のやうなものだ。資本の奴隷どもは、漸く真人間の仲間入をしようとする権利を得ながら、半途にしてこの宗教といふ下等な火酒^{くわしゆ}の中に溺没^{できぼつ}してしまふのである。ときへ罵^{のの}つてゐる。近ごろ読んだああいふレニンの言葉に較べると、『無神無仏の徒は既に神を無みし仏を無みするだけの』云々といふ幸田露伴翁の言葉には、少しもそこに反語がないところ

に露伴の面目がある。レニンのものの如くに、“streitbar”とか“[revolutionar:]”とか謂ふ臭氣がまつはつてゐない。そんな事を私は一人ながら思つた。レニンの病氣もその後悪いさうだが、追つかけ死ぬだらう。臨終の近くに誰かがどういふ言葉かを掛けるだらう。それが所詮、希臘加特利教の儀式の代弁ならつまらぬなどとも私は思つた。

十二月十四日に宿の上さんに転宿のことを話し、翌十五日に日本媼のところに引越して来た。その晩に将棋を差したが、駒も盤も大戦前の留学生が置いて行つたものである。戦時中、老媼の一家がいまのところに引越して来たにも拘はらず将棋の如き、かういふ品物をも無くさずに持つてゐたのであつた。

大正三年に大戦が勃発し、留学生どもは逃げたのであるが、大正十一年の一月に私が柏林に著いてミュンヘンの事情をさぐると当時ミュンヘンは唯ひとりの日本人が特別の許可を得て研究してゐるに過ぎず、ここへの入国は嚴重で出来なかつたのである。その七八年の間将棋の駒を無くさずにゐたのは私にはおもしろい。私はここに寄寓しておのづと大地震に対する驚愕の念を静めて行かうと思つたのであつた。

青空文庫情報

底本：「斎藤茂吉選集 第九巻 随筆」岩波書店

1981（昭和56）年2月27日 第1刷発行

初出：「改造」

1929（昭和4）年10月

入力：しだひろし

校正：門田裕志

2012年4月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本大地震

斎藤茂吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>